

報告

自主的な学びを目指す「学びのコミュニティー」活動 — 学生・社会人・教員で創る生涯学習の形 —

光永雅子¹⁾・中恵真理子¹⁾・齊藤隆仁^{1) 2)}・的場一将³⁾・大橋眞^{1) 2)}

徳島大学・1) 全学共通教育センター、2) 大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部、
3) 総合科学部

(キーワード: 自主講座 生涯学習 学びのコミュニティー)

Activities of “community-based learning” intended for self-motivated study - A new style of lifelong learning created under the cooperation of students, men from the local community and teachers-

Masako MITSUNAGA¹⁾, Mariko NAKAE¹⁾, Takahito SATO^{1) 2)}, Kazumasa MATOBA³⁾, Makoto OHASHI^{1) 2)},
1) Center for General Education, 2) Institute of Integrated Arts and Sciences, 3) Faculty of Integrated Arts and
Sciences, The University of Tokushima

(Key words: self-initiated lecture, lifelong learning, community-based learning)

1. はじめに

21世紀は、新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す、いわゆる「知識基盤型社会」(knowledge society)の時代であると言われる⁽¹⁾。さらに、グローバル化の進展はその新しい知識や情報、技術の伝播を容易にする。このような変化の激しい時代にあって求められるのは、既成の価値観にとらわれず、新しい創造性を生み出す柔軟な思考力、自ら課題を見つけ取り組む積極性、グローバルな時代にふさわしい多面的な理解力など、総合的な豊かさを持った人材である。特に高等教育機関には、専門分野についての専門性を有するだけでなく、幅広い教養、高い公共性、倫理性を保持し、時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、あるいは改善していく資質を有する人材、すなわち「21世紀型市民」を育成していくことが求められている⁽¹⁾。また、21世紀は柔軟性と変化の世紀であり、すべての人々にとって流動性に対応するためのパスポートは教育と生涯学習である⁽²⁾として、世界へ開かれた大学としての生涯学習機能の重要性も増してきている。

平成20年度質の高い大学教育推進プログラムで採択された「地域社会人ボランティアを活用した教養教育～知の循環型社会の構築を目指して

～」において実施された、共創型学習科目をはじめとする様々な取組は、まさに21世紀型市民とは何か、流動性に対応するパスポートとしての教育・生涯学習とは何かを、学生・社会人・教員の三者の学びの合いによって問い直し、考えてゆく試みである⁽³⁾。また、課外活動として高等教育研究会を立ち上げ、この取組の意義を様々な角度から検証しつつ、創造的な発展を目指す議論が交わされた⁽⁴⁾。

2年目となる今年度は、高等教育研究会を「学びのコミュニティー」とし、課外での取組をさらに発展させることで、自主的な学びの場の創出を目指した。そこに集う学生や社会人の個性のように多岐にわたる学びの活動が展開された。本報告では「学びのコミュニティー」で行われている活動を紹介するとともに、授業の枠を超えたそれらの活動が、個人の中でどのように新しい学びへと転換されたのかについて、活動に参加した学生、社会人、教員の声をもとに報告する。

2. 昨年度の取組について

まず、昨年度の社会人ボランティアが参画した授業と、課外活動である高等教育研究会について概観する。

2. 1. 社会人参画の授業

昨年度は前・後期で共創型学習科目 15 授業、教養科目 3 授業が実施された。特に共創型学習科目は少人数のゼミ形式で、この取組のコンセプトが最も象徴的に表される授業である。しかし、それまでは同年代を中心としてのコミュニティーの中で学習を行い、教員から教えられるという形で知識を身につけてきた多くの学生にとって、世代、経験の異なる社会人や教員と意見を交換すること自体が初めての経験であり、ハードルが高い部分も垣間見られた。また、共創型学習という授業形式は、教員にとっても学生と社会人とのコーディネーター役として役割を果たすことに難しさがあったようである。また社会人の長年の社会経験の中から発する言葉には、実社会の厳しさを学生に伝えようとする思いが全面に出されがちであった。それぞれの持つ豊かな個性を発揮しながら、幅広い観点から授業の課題についてのコミュニケーションを行うことの難しさを感じつつ、新しい試みへの期待が高まり、様々な感動が入り混じった初年であったように思う。

前期・教養科目「宗教と科学」（履修者数学生 96 名・社会人ボランティア 5 名）において実施したアンケートでは、＜地域社会人が授業に参画することは良いと思いますか？＞という質問に対して『大いにそう思う』が 25%、『そう思う』が 35%、『どちらでもない』が 28%、『そう思わない』が 7%、『全くそう思わない』が 5%という結果が得られた。また、自由記述では以下の回答が得られた。

(学生)

- ・これまでの授業とは全く違って戸惑いがあったが、いい経験になった。
- ・社会人のみなさんの発言にはなるほどと思う部分がありますが、もう少し私たちの意見にも耳を傾けてほしい。
- ・普段考えたことのないテーマについて考えることは自分の思い込みに気付くきっかけにもなった。
- ・先生の考えや意見をもっとわかりやすく聞かせてほしい。
- ・相手の話を聞きながら、自分の考えをまとめる

作業、それを言葉にする難しさを改めて感じた。(社会人)

- ・学生さんたちにはどンドンと積極的に発言してほしい。
 - ・学生のみなさんは良い意見を持っている。もっと自信を持って発言してもよいのでは？
 - ・もっと実社会について勉強すべき。体験も少ないように思う。
 - ・若いみなさんの意見を聞いて非常にうれしい。もっと学び合いたい。
- (教員)
- ・学生と教員だけでは成し得ない発展や展開が議論の中で生まれた。
 - ・社会人の学ぶ姿勢をみて学生が学ぶという新しい学びのスタイルだ。
 - ・社会人や学生の本音の発言をもっと引き出せたらと思った。
 - ・社会人は先輩であり、地域のおじさん、おばさんでもあり、親や祖父母でもある。多様な存在感が授業の広がりには必要。

これらの回答からは、授業の中における三者の出会いから始まり、互いの存在感や発言から相手との距離を感じつつも、学び合いに至る前段階の、“気づき”の段階にあることがうかがえる。“気づき”は、この取組の最初の関門ともいえる、自分とは異なった考え、違う意見を有する相手に対しての理解と受容という「教養」へ向かうための重要なファクターである。それが自然な形で生み出されたところに、学生と教員という二者の関係、あるいは教員から学生へという一方向型の講義スタイルを超えた意義があるといえる。

また課外活動としての高等教育研究会は、後期 10 月から開催され、毎週火曜日午前 10 時 30 分～12 時、大学教育に関心のある教員、学生、社会人が参加して全 12 回実施された⁽⁴⁾。延べ人数で、学生 36 名、社会人 48 名、教員 60 名が参加し、教養教育を中心とした授業改善に向けた取組の事例紹介や、学生、社会人から見た大学教育の問題点を取り上げ、基調報告による問題提起の後、その解決策を探るために、学生と教員が同じテーブルについて議論を行った。(表 1)

表1 各回の基調報告のテーマと報告者

回	基調報告のテーマ	報告者
1	教養教育の在り方について	教員
2	個性あふれるFD	教員
3	学問と社会の間	学生
4	共通教育の授業について	学生
5	一般教養はなぜ必要か	社会人
6	共創型学習科目に参画して	社会人
7	教養教育を振り返って	学生
8	学生による高等教育研究会	学生
9	教え込む教育から、引き出す教育へ	教員
10	韓国の文化について	社会人
11	大学に伝えたいこと	社会人
12	地域と大学	教員

課外活動である高等教育研究会をきっかけとして、三者の理解がより深まり、今年度の学びのコミュニティー活動へと広がったことは確かである。また上記の発話から、多くの問題提起がなされ、大学教育が直面する様々な課題が明らかになった。特に、社会人からは大学の社会への関わり方などについて多くの意見が出された。

3. 今年度の取組について

3. 1. 場の変化と学びのスタイルの変化

昨年度に引き続き、今年度も前・後期の共創型学習科目 16 授業、教養科目は 6 授業で社会人ボランティアの参画があった。今年度は、昨年度、三者がそれぞれ感じた“気づき”を三者が共有する“学び”へと発展させるための取組の在り方について、取組関係者による議論がなされた。この取組の関係者の一員として強く感じたことは、授業においても、課外活動においても学生と教員、あるいは学生と社会人とのコミュニケーションの弱さである。世代的なこともあり、どうしても学生は社会人や教員の話聞く側になってしまう傾向があった。この一方向型関係から互いに学びを共有する双方向型関係へと変化を促すためには、意識の変化が不可欠である。しかし、関係性や意識といった目に見えないものの変化は容易ではない。そこで、物理的な変化を体験することで意

識の変化をそれぞれの中で引き起こすきっかけになるのではと考えた。一つは場の変化であり、もう一つは学びのスタイルの変化である。ここでいう場の変化とは授業外での学びの場、つまり学びのコミュニティー活動である。このような学びのスタイルを変化させるような変革の全てが、課外活動の成果であることの意味は大きい。なぜなら、このような変革が引き起こされるためには、教員から授業を受ける、話を聞くという受動的な学びから、自らが主体的に活動に参加し、世代を越えて共に学ぶという能動的な行動が個人の中で喚起される必要があるからだ。また、過年度に社会人と共に授業や活動を行った学生が、新年度にどのくらい学びのコミュニティー活動に再び参加するのも重要なポイントであるといえる。また学びのスタイルの変化とは、自主講座に自主的に参加するとか、自主講座の企画をおこなうような学び方の変化である。学士課程における一般の講義形式の授業でも、あるいは生涯教育における公開講座等でも多くの有意義な学びがある。しかしそれは用意されている学びで、積極性を十分に発揮したとしても、受講者はあくまでも受講というスタイルの中での能動性である。自主講座は、そこから一歩、あるいは二歩すすめて、自ら企画し、発信し、学びを創出しようとする試みである。そして、この学びの創出に至る為のエネルギー源が、好奇心である。学ぶということは、本来自然なことで、自身の中に湧き上がる好奇心によって学びへの動機付けがなされる。しかし、初等中等教育のある時期から好奇心による学びは次第に失われ、進級、進学などのための試験という評価の対象のための勉強になってしまっているきらいがある。それはある意味では、好奇心を喪失させる教育であるといえよう。このように、好機心というエネルギー源を失ってしまった勉強の行く末が、今の大学教育が直面している問題点のひとつであるように思う。学びのコミュニティーでの自主講座に参加することは、この問題点から脱却する行動であるという面を内包している。授業という枠組みでもなく、評価の対象としてでもない、好奇心から得られる学びへの意欲を、自由な発想と企画力を持って表現しながら、共に学び合

うことの感動がコミュニティーに相乗的な広がりをもたらし、その結果として発想の想定外の展開をも共に体験できるなど、このコミュニティーで新たに形成される総合的な「知」が育まれるという効果を持った新しい教育の形である。

3.2. 自主講座の開講

このような経緯をたどって、「学びのコミュニティー」の自主講座が、様々なテーマで開講されてきた。その活動を報告する。

3.2.1. 実用健康学～手当てとそのころ～

(全10回)

日時：隔週火曜日 9:00~10:10

隔週木曜日 14:20~15:30

(両日同じ内容で実施)

場所：学生支援室

参加人数：学生70名、社会人23名、教員11名
(延べ人数)

社会人ボランティアとして昨年度から授業に参画している、元鍼灸師と元薬剤師の社会人と教員による自主講座。長い間、人の健康と命について見つめ続け、考え続けてこられたお二人の経験を交えながら、主に東洋思想の視点から全10回が実施された。講座の趣旨に共感した学生と社会人ボランティアによって構成され、教員はコーディネーター役として参加した。毎回テーマに沿って参加者と意見交換をし、世代間の差があるからこそできる、知識と経験、そして新たな発想の交流という学びが広がった。(図1,2)

<各回のテーマ>

- ① 陰陽五行説
- ② 健康って? 『素問・養生訓より』
- ③ 自分の証を知る。『補と瀉』
- ④ 徳島大学薬用植物園見学
- ⑤ 西洋薬と漢方薬
- ⑥ 食と健康
- ⑦ 薬膳料理実習
- ⑧ 身体と心の手当て
- ⑨ 健康リスクを考える
- ⑩ まとめ



図1：『ツボ』について質問する学生



図2：薬草園見学

<参加者の声>

第7回終了時に参加者13名(学生7名、社会人4名、教員2名)に対して行った自由記述式アンケートより。

(学生)

- ・好奇心が刺激された。
- ・視野が広がった。
- ・東洋思想の考え方が印象深く、新しい視点を持てた。
- ・毎回参加者と意見交換ができて良かった。
- ・自然と私たちの健康とのあり方について考えさせられた。
- ・将来自分の仕事をイメージしながら考えることができた。
- ・本当の健康とは何かについて改めて考えさせられた。
- ・植物についてもっと知りたいと思った。

(社会人)

- ・皆さんの健康への関心の高さに感銘を受けました。

- ・年齢差を超えた意見交換ができることはとてもいい刺激になります。
- ・みなさんの前で自分の経験を語ることで、改めて伝えることの難しさを学びました。
- ・世代を越えて伝えられたものにはどういった意味があるのか、もう一度みんなで考えてみたい。
- ・一緒に文献を読み合うことで、また新しい視野が開けた。

(教員)

- ・健康である今こそ、本当の健康とは？を考えてみるのが大切だと実感した。
- ・東洋思想が東洋人である我々の中にも息づいていることを再認識した。
- ・お二人の健康に対する理論と実践をうかがって、人としての幸せについて学生と議論できたことが非常に意義深かった。

3.2.2. 恋のうた学習会

(現在、第6回目まで実施)

日時：毎週金曜日 15:00~16:30

場所：学生支援室

参加人数：学生12名、社会人25名、教員9名(延べ人数)

昨年度、社会人ボランティアとの課外活動に参加してきた学生による自主企画。自身が万葉集のある恋のうたに心動かされたことをきっかけに、世代を越えて人を想う気持ちについて語り合いたいと企画、実施している。毎週、万葉集から<恋のうた>を3句選出し、参加者と共にそのうたの解釈について議論行っている。第1回目は堤和博准教授にガイダンスをお願いし、万葉集についての勉強会を開いた。その後は企画者と参加者によって実施されているが、留学生も参加しており、<恋のうた>を鑑賞し、それぞれの解釈を発表し合いながらも、日本の歴史や文化を考える要素も含んだ学習会となっている。来年度も引き続き継続していく予定である。(図3,4)



図3：第1回 恋のうた学習会



図4：第5回 恋のうた学習会 リラックスした雰囲気学び合いを進めている。

<参加者の評価(表2—表4)と声>

第1回目から第5回目までの参加者39名(学生10名、社会人21名、教員8名)に対してアンケートを実施した。

表2 企画の内容についての回答

項目	人数	%
大変良い	25	65
良い	10	25
普通	4	10
あまり良くない	0	0
良くない	0	0

表3 学問的知識が向上したかについての回答

項目	人数	%
大変向上した	14	37
向上した	16	40
どちらでもない	7	18
あまり向上しなかった	2	5
向上しなかった	0	0

表4 参加者との交流から学んだかについての回答

項目	人数	%
大変学んだ	12	30
学んだ	18	47
どちらでもない	6	15
あまり学ばなかった	2	5
学ばなかった	1	3

自由記述式アンケートより

(学生)

- ・人生経験を積んだ社会人の方の意見を聞けることは貴重。
- ・自分が思っていたより、かなり奥が深く、新しい視点が持てた。

(社会人)

- ・大変面白い試みだと思います。若い方と意見交換ができるのはとても楽しいです。

- ・みんなで歌を詠んでみるのもいいと思います。

(教員)

- ・うたの背景にまで踏み込んだ議論は非常に興味深い。
- ・社会人の方がリラックスした学習会の雰囲気づくりに貢献しているのがうかがえます。

3.2.3. 星空観賞会

日時：2009/10/28 (水) 18:30~20:00

2009/10/29 (木) 18:30~20:00

(両日同じ内容で実施)

場所：学生支援室および天体観測室

参加人数：学生14名、社会人7名、教員8名

この企画は、実用健康学に参加している学生の声をもとに、企画、実施された活動である。＜課外の学習会で学びたいこと＞というアンケートを行ったところ＜天体観測と宇宙、星座について＞という意見が寄せられた。そこで伏見賢一准教授にガイダンスをお願いし、特別課外学習会＜星空観賞会＞を開催した。天体観測室での観測の他、屋上に寝袋を敷いて参加者全員で星空を見上げるといった試みも行った。(図5,6)



図5：ガイダンスの様子



図6：5号館屋上での観測

＜参加者の声＞

自由記述式アンケートより

(学生)

- ・アットホームな雰囲気でもとても良かった。
- ・もっと長い時間星を見たかった。
- ・別の季節も開催してほしい。
- ・先生の話をもっと聞きたかった。宇宙についての興味が広がった。

(社会人ボランティア)

- ・もう少し遅い時間に開催しては？
- ・もっと時間をかけて説明を聞きたかった。
- ・楽しい企画でした。また参加したい。
- ・季節ごとに開催してほしい。

(教員)

- ・星空の関係で、時間を遅くにしたほうが良いと思う。
- ・もう少し時間をかけてもよかったと思う。
- ・告知の期間を長めに設けて、前もって質問などを受け付けておくのも良いと思う。

最も多かったのは、時間帯、季節などを変えて見てみたい、もう少しゆっくりと眺めてみたいと

いう意見が70%を越え、天体観測に対する興味の
高さと次回開催への期待がうかがえた。また、こ
こでのアンケートでは、他の課外学習のテーマに
ついてのアイデアもいくつか出されていた。植物
観察、動物の生態観察、遺跡巡り、徳島の歴史と
文化など、フィールドワークを伴うものへの希望
が多くみられた。体験を通じた取組に参加するこ
とで、体験を通じた学びへの自然な回帰がみられ
たようにも感じられた。なお、第2回目の星空観
賞会は、伏見准教授の提案によって12月11日
(金)19時~20時の時間帯で<ふたご座龍流星
群を見よう!>というテーマで実施され、さらに
学外からの参加者も多くみられたが、残念なこと
に天候に恵まれなかったためガイダンスのみで
終了した。天体観測は年齢、世代を問わず興味を
引くテーマであり、参加しやすい利点があるが、
逆に体験で満足しその後の学び合いに至らず終
わってしまう傾向があるように思う。企画側の目
的意識の明確化、コーディネート力が課題として
挙げられるだろう。

3.2.4. スカイプを使った国際交流

日時：毎週月曜日 16:30~18:00

<青島理工大学 全10回>

毎週金曜日 16:30~18:00

<モンゴルビジネス大学 全5回>

場所：学生支援室及び3号館1階スタジオ

参加人数：青島理工大学（学生53名、社会人36
名、教員21名 延べ人数）

：モンゴルビジネス大学（学生20名、
社会人12名、教員7名 延べ人数）

現在、スカイプを使った国際交流が毎週行われ
ている。月曜日は10月より中国・青島理工大学
の3年生の学生と、金曜日は12月よりモンゴル
ビジネス大学の2年生の学生とスカイプによるビ
デオ交流である。毎回テーマを決めお互いに質問
をし、意見を交換するという地道でゆっくりとし
た交流である。国際交流というと組織や団体が全
面に出されがちであるが、相手の顔を見て、お互
いの文化や歴史について考え、意見交換しながら
理解を深めていくという、まさに国際交流とは何

か？国際交流から何を学ぶのか？と問いかけな
がらの試みである。（図7,8）

<青島理工大学との各回のテーマ>

- ① 日本のアニメに見る自然観と人間観
- ② 男性の化粧について『男らしさ女らしさとは』
- ③ 映画『1 リットルの涙』から見る家族愛や人
間愛について
- ④ アニメ『Naruto』から見る師弟愛や友情など
について
- ⑤ 中国における餃子が持つ意味と日本での餃子
の文化について
- ⑥ オノ・ヨーコをはじめとする女性活動家にな
らぬについて
- ⑦ 恋愛観について『結婚とは本当の愛とは』
- ⑧ 中国における魚がもつ意味と日本のことわざ
について
- ⑨ 両国の伝統衣装と家屋がもつ文化について
- ⑩ 日本の食文化を代表するお寿司について



図7：青島理工大学とのスカイプ交流

<モンゴルビジネス大学との各回のテーマ>

- ① 自己紹介及び両大学の紹介
- ② モンゴルの伝統文化や風習の紹介
- ③ 日本の自然や伝統建築等の紹介
- ④ クリスマス、新年の祝いについて
- ⑤ モンゴルの正月行事

両大学の学生は共に日本への関心が非常に高
く、もっと日本語を学びたいという意欲だけでな
く、日本の文化や歴史を知って理解を深めたいと
いう積極的な姿勢が随所に見られる。学びに対し
ての積極性や未知なる世界に接するようないき

いきとした表情は、私達に学ぶことの本質を問いかけ、もう一度振り返らせる力がある。スカイプを使った国際交流の意義はそこにあるといえるだろう。



図8：モンゴルビジネス大学とのスカイプ交流

4. まとめ

現在、学びのコミュニティで実施されている活動について、参加者の声とともに紹介した。その他にも現在企画中の取組もあり、内容、告知等は当該取組のホームページ

(<http://w3.ias.tokushima-u.ac.jp/sgp/>)や毎週水曜日発行の『週刊学びのコミュニティニュース』で発信している。

場の変化と学びのスタイルの変化の融合によって、好奇心という学びのエネルギーを刺激しようと、様々な活動を行っているが、どの活動も基本にある理念は『人からの学び』である。人は人から学ぶという、最も基本的で自然な学びが、自主講座の中でうまれていることがうかがえる。そして興味深いのは、三者の学び合いによってより影響を受けているのは教員や社会人側であるように思われることだ。自主講座に参加した教員は、大学が社会と関わる意義を地域の人と一緒に考える重要性に気付いたという。また、ある社会人は、学生の発言を聞いて、自分の課題が見えたことこの取組に参加したこと意義を強調された。そして自主講座の企画に携わった別の社会人は、もう一度自分ができる社会貢献を考え、行動する気力が湧いたと発言されていた。

柔軟性と変化の時代といわれる21世にあって、真の意味でのユニバーサルな学びが求められて

いる。年齢や性別や民族、その他様々なボーダーを無理なく越える、まさに万能のパスポートとしての学びである。当該取組で実施している授業や活動には、様々な世代や個性を持った人々の存在が何より必要である。そこで行われる交流そのものがユニバーサルであるし、そこで生まれたユニバーサルな議論が、やがて総合的な「知」となって新たな学びを生み出していく。この体験こそが、学びの本質であり、生涯にわたって学びを継続していく喜びの源であるといえるだろう。

謝辞

今回の取組に協力いただいた徳島大学ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス・研究部伏見賢一、堤和博両准教授、境裕美さんと、地域社会人の方々、青島理工大学の鄭講師、モンゴルビジネス大学プージェー講師に感謝します。

参考文献

1. 文部科学省 中央教育審議会答申 (2005) 我が国の高等教育の将来像
2. 文部科学省 中央教育審議会答申 (2000) グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について
3. 大橋 眞、中恵真理子、光永雅子、Steve T. FUKUDA、斎藤隆仁、菊池 淳、香川順子、廣渡修一 (2009) 「大学教育改革と教養教育-地域社会人活用による知の循環型社会構築に向けて」-『大学教育研究ジャーナル』 6:88-97
4. 光永雅子、中恵真理子、Steve T. Fukuda、斎藤隆仁、金成香奈子、的場一将、大橋 眞 (2009) 学生・職員・教員参加型の教養教育FD活動-UD (University Development) 活動としての意義 『大学教育研究ジャーナル』 6:98-102